馳星周
Hase Seisyu

SLEEPLESS TOWN

不夜城

恭賀發財歡迎光臨

角川文庫

不夜城（ふやじょう）

馳星周（はせせいしゅう）

角川文庫　10665

平成十年四月二十五日　初版発行
平成十年五月二十五日　三版発行

発行者——角川歴彦
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部（〇三）三二三八—八四五一
営業部（〇三）三二三八—八五二一
〒一〇二—八一七七
振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——鈴木製本
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部サービスセンターにお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Seisyu HASE 1996　Printed in Japan

は 21-1　ISBN4-04-344201-7　C0193

不夜城

融 貝田

角川文庫 10665

不夜城

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

暗闇の中に浮かび上がる銀幕で
誰よりも輝いている袁詠儀に

黒い夢の中
おれは安らかに眠る

竇唯　「黒色夢中」

1

土曜日の歌舞伎町。クソ暑い夏の終わりを告げる雨がじとじとと降っていた。

区役所通りを職安通りに向かって歩いていた。手にさげたスポーツバッグがわずらわしかった。土曜と雨が重なった区役所通りは、平日の半分の人影もなかった。狭い歩道を占拠しているのは、ミニから伸びた足をこれみよがしに突きだしている女たちと客引き、それに中国人たち。ときおり、南米や中東の顔も見えるが、数えるほどでしかない。日本語よりも北京語や上海語の方がかまびすしい歩道の脇では、客待ちのタクシーが延々と列を作っていた。

客引きや女たちの手を擦り抜けて、風林会館前の交差点を左に。学生らしき一団が、群れをなして道路一杯に広がっていた。

しばらくそのまま歩き、果物売りのヴァンが止まっている角を右に曲がった。ガキどものやかましい嬌声が消えた。香ばしい匂いと、キムチの強烈な刺激臭が鼻をついた。ここらあたりには韓国人の屋台が多い。

目当ての雑居ビルの前に、目つきの鋭い中国人が二、三人固まってまわりをうかがっていた。

「よう、健一（ジェンイー）さん」
そのうちの一人がおれに気づき、北京語で叫んだ。
「遅かったじゃないか。女たちが待ち侘（わ）びてるぜ」
「でかい声でしゃべりたいんなら、国へ帰れ」
じろりとチンピラを睨（にら）み、北京語で囁（ささや）いた。こんなやつらをいつまでも使う気でいるなら付き合いを考えると、一度、元成貴（ユエンチョンクイ）にはきつくいっておかなきゃならない。もっとも、元成貴がおれの言葉に耳を貸すとも思えないが。
「そんなにおっかねぇ顔するなよ。北京語がわかる日本人なんて、ここらにゃいないだろう」
「おれだ」
そいつの目に顔を近づけていってやった。
「おれは日本人だが、北京語を話せる」
「け、健一さんは特別じゃないか……」
そいつはおれから視線を外すと、逃げるように肩を引いた。
「いいか、おれたちは遊んでるんじゃない。仕事をしてるんだ。危ない橋を渡ってな。日本人にはわからなくても、北京（ペイジン）や福建（フージェン）のやつらはどうだ？　マレーシアは？　あいつらには、おまえの上海訛（なま）りの北京語は通じないか？」
チンピラは上海語でぶつぶつと文句をたれた。おれはあいている方の手でそいつの髪を

摑(つか)み、引き寄せた。
「いいたいことがあるなら、北京語で話せ」
静かにそういい、じっとやつの目を見つめてやった。油膜がかかったような濁った目が逃げ場所を求めて動きまわり、やがて、力なくおれの目を見つめ返した。
「わかったよ。この雨ん中でずっと外で待たされてたから気が立ってたんだ。これからは気をつける」
「いい子だ」
そいつの肩を叩(たた)き、横にいた別のチンピラにスポーツバッグを手渡した。
「今日のブツだ。たいしたものはないが、早く女たちに見せてやれ」
バッグを受け取ったチンピラを先頭に、おれたちはビルの中へ入っていった。

2

先頭のチンピラが〈紅蓮(ホンリエン)〉の扉を開けた。透きとおった声のカラオケが通路にこぼれてきた。目ざとくおれの姿を見つけた女たちが、客をそっちのけで立ちあがり、歓声を上げた。腹を空かして主人の帰りを待ち侘びていた犬のような声。
おれは愛想笑いを浮かべて女たちに手を振り、一番奥にある目立たないボックス席に腰をおろした。チンピラたちは反対の奥にある従業員の控え室に姿を消した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

煙草に火をつけ、店内を眺めまわした。客は半分ほどの入り。ほとんどが日本人。脂でぎとついた顔をてかてかに光らせて、日本語をよく理解できないホステス達を口説いている。

正面に視線を移した。カラオケを歌っているのは李桂梅（リーグイメイ）。この店に三人いるママのひとりだ。王成香（ワンチョンシャン）、黄秀紅（ホウンシウホン）は、それぞれ馴染（なじ）みの客のテーブルについている。

三人のママはそれぞれに個性的だ。共通しているのは金にがめついことぐらいしか思いつかない。ママたちは家賃、仕入れなどの経費を折半でまかなう。店に来ている従業員やホステスもそれぞれのママが調達し、給料を払う。要するに、ひとつの店の中で三軒のクラブが営業しているのだ。市場みたいなものだと思えばいいのかもしれない。バブルが弾けてからこっち、こんなシステムで店をやりくりしている中国人や台湾人の店はかなり多い。黙っていても金が転がりこんでくる時代は終わったのだ。

黄秀紅が客になにかを囁いて、立ちあがった。尻のつけ根までスリットが入ったチャイナ・ドレスをくねらせて近づいてきた。

「遅かったじゃない」

きれいな北京語。秀紅は、おなじだけきれいな日本語を操ることもできる。数年前に失脚した党幹部の娘で、北京大学から東京大学へ国費留学し、そのまま新宿に居着いてしまったという経歴は伊達（だて）じゃない。だが、客と話す時以外は、決して日本語を使おうとはしなかった。身内で話す時は、上海語しか使わない。つまり、おれは身内じゃないってこと

だ。
「雨が降ってるからね」
いいわけにもならない言葉を口にして、秀紅がくわえた煙草に火をつけてやった。視界の隅に、女たちがひとり、またひとりとカウンターの横の薄いカーテンで遮ってあるだけの奥の部屋へ消えていくのが見えた。すぐに、子供じみた嬌声が聞こえてくる。
今回はなかなかいいブツが回ってきた。おおかた、どこかの倉庫で眠っていたものだろうが。
「わたしの甥がエアコンを欲しがってるの」
秀紅が誘うような眼差しをこっちへ向けた。
「もう、夏も終わりだぜ」
「夏の間は国に戻ってて、ついこのまえ帰ってきたばかりなのよ」
「いくら出せるんだ？」
「五万」
舌打ち。五万ぽっちじゃ、おれの懐へはほとんど入らない。
「甥が住んでいるのは1Kのマンションだから、それほど大きいのはいらないの。メーカーにもこだわらないわ」
「あたりまえだ」
ソファに背を預け、天井に向けて思いきり煙を吐きだした。こんな馬鹿げた仕事を引き

受けていたら、そのうち足元が覚束なくなるに決まっている。だが、秀紅との関係を密に保っておくのは、おれのような根なし草にはそれなりの意味がある。

「二週間ぐらいかかるぞ」

天井を見上げたまま、いってやった。秀紅がほっとしたように息をもらす気配が伝わってきた。

「助かるわ、健一。なにかあったら、わたしにいってね」

元成貴の情婦にそういわれるのは、思ったよりは気分のいいものだった。

奥の部屋へ消えていた女たちが戻ってきた。新しい装飾品を指や手首、首に巻きつけ、口もとをゆるめながら。

「もうすぐ、毛皮が欲しいっていいだすわよ。あの子たち」

秀紅はろくに吸ってもいない煙草を灰皿に押しつけた。もはや若くはなく、かといってくたびれきったわけでもないというような目で、客の相手をしはじめた女たちを眺めていた。

「いいさ。金さえきちんと払ってもらえるならな」

おれがとっちめてやったチンピラが、カーテンの仕切りから姿を現した。おれの視線に気づいたのか、秀紅が腰を上げた。

「ゆっくりしていってね。お金はいらないから」

あたりまえだ。ふたたび口に出そうになった言葉を、喉で押し潰した。

「健一さん、今日の分です」
秀紅の色っぽい尻を眺めていると、チンピラが恐縮したようにおれの前に立ち、茶色い封筒を差しだした。
五十万というところか。シケた金だ。今の日本じゃ、五十万なんてはした金にもならない。だが、おれのような商売をしている人間には、女たちがもたらしてくれる情報は必要不可欠だ。たまにはこうして、機嫌を取ってやらなきゃならない。
封筒の中から十枚ほどの札を引き抜き、チンピラに手渡した。
「たいした額じゃないがおれの奢りだ。今夜はみんなでパーっとやろう。手のあいてる女を呼べよ」
チンピラの顔がぱっと輝いた。
「ありがとうございます、健さん」
おれはなんでもないというように軽く手を振った。別に大物ぶりたいわけじゃない。ただ、この雨の中、ねぐらへ戻ってひとり酒を啜る気になれなかっただけだ。
ケチな故買屋にだって、たまにはそんな夜がある。

3

夢を見ていた。いつもの夢。ナイフがきらめき、肉が裂け、血が飛び散った。

携帯電話が鳴った。隣で、女が寝返りをうった。名前を思いだそうとしたが、途中で諦(あきら)めた。おれは床に脱ぎ捨てたままだった上着を拾い上げ、内ポケットから電話を取りだした。

受話器から飛びこんできたのは乾いた女の声。日本語だった。

「劉(りゅう)さん……ですか？」

電話を切った。

間を置かず、また電話が鳴った。舌打ちして、電話を手に取った。

「王(おう)さんから紹介してもらったんです。劉さんなら力になってくれるかもしれないって」

女は早口でまくしたてた。微かな訛りがあったが、どこのものかはわからなかった。

煙草に火をつけ、王(ワン)という名前の人間の顔を思いつくだけ頭に浮かべた。

「もしもし？」

「どこの王だ？」

「元(げん)さんのところの……」

歌舞伎町には王という名の中国人は腐るほどいる。元だってそうだ。だが、歌舞伎町にはひとりだけ特別な元がいる。元成貴(ユエンチョンクイ)という男だ。そいつの機嫌を損ねたら、歌舞伎町はとんでもなく暮らしにくい街になる。女のいっている元が元成貴かどうかはわからないが、とりあえず話を聞くことにした。

「それで？」

「買っていただきたいものがあるんです」
また舌打ち。歌舞伎町の中国人社会の人間からしかかかってこないはずの携帯電話から日本人の声が流れてくる。おれは不安を覚えていた。おれはこの携帯電話を仕事には使わない。探偵や強請り屋、それに頭のイカれた盗聴おタクどもがありとあらゆる電波を拾おうと夢中になっているってのに、携帯電話で重要な話をするのはカモってくれと大声で宣伝しているようなものだ。
「ブツは？」
「直接、見せたいんだけど」
煙草を吸い、間を取った。嫌な感じがぷんぷん匂った。だが、このままうっちゃっておくには足元が涼しすぎる。
「明日、昼の三時。だいじょうぶか？」
おれはいった。最悪の場合、女を尾行して身元を確認するつもりだった。
「え、ええ」
「風林会館の前にいろ」
「わかりますか？　わたし、髪は……」
「こっちで見つける。もし、劉と名乗る男が現れなかったら、手違いがあったと思って諦めてくれ」
「でも……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com